

最優秀賞

# 千本すぶり

東京都 学習院初等科四年 田口 琴乃美

「千本すぶり始め！」

松園先ばいの力強い声が、道場にひびき渡る。

「面！…面！…面！…」

私の小学校には、五十年以上の歴史を持つ剣道部がある。四年生以上が入部できる。練習は、朝や土曜日。夏合宿や寒げいこもある。

「合宿の日、早く来ないかな。」

でも、一つだけ心配なことがあった。千本すぶりだ。最後までしっかりやりとげられるかどうか気がかりだった。私は、兄の千本すぶりを見学したことがある。兄やその友達がとてもつらそうに見えた。あれから二年。いよいよ私の番。楽しみな気持ちと、そんな不安な気持ちを持って、剣道部の合宿が始まった。

千本すぶりの前日、「こし入れすぶり」を百本やった。深くふみこんでひざを曲げ、こしを落とす。

百回で体中へとへとになった。

「今日の十倍だぞ。」

夜のミーティングで富永先ばいが言った。

「えろろろ!!」

私の、心の声が、口から音になって出てきてしまった。明日は大丈夫かな。千本すぶりは、二百、三百、三百、二百と、短い休けいを取りながら千本ふる。

「面！…面！…面！…」

一本、一本、一本…。ふりかぶりは、四十五度。ふりおろしの時は、右うでが床と並行。左うではみぞおちのあたりで止める。手と同時に足を出す。一本一本ていねいにふる。

二百本くらいまでがとてもきつかった。二百を過ぎたあたりから、つかれたと思うのをやめて、ふることだけに集中することにした。

何本ふっただろうか。ふと気が付くと、私の中に

